

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370329

研究課題名(和文) 合衆国における貧乏白人の文化的表象の歴史の変遷

研究課題名(英文) A Historical Analysis of the Cultural Representations of Poor Whites

研究代表者

権田 建二 (GONDA, Kenji)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：00407602

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、貧乏白人という、18世紀から現在まで合衆国に存在してきた社会階級の文化的表象の歴史の変遷をたどった。下層の貧乏な白人は、植民地の時代から現代に至るまで常に存在し、白人と非白人との緊張関係を時には激化させ、時には緩和させて、人種関係を形作るのに重要な役割を果たしてきた。しかし、それにもかかわらず貧乏白人が、白人でもなく非白人でもない「貧乏白人」という独立した存在としてみなされることはあまりなかった。それは、あくまでも白人であって、白人ではないという両義的で曖昧で時として不可視であり、まさにそうであるがゆえに、緊張に満ちた人種関係、階級関係を根底から支えてきたのである。

研究成果の概要(英文)：In this study we analyzed the historical development of the representations of poor whites in American literature and culture. Poor whites have always been present in the United States from the colonial times to the present. They have played an important role in the formation of race relations by sometimes increasing the tensions and at other times alleviating them in race relations. Yet poor whites have never really been given a separate status. They have usually been defined not as an independent class that is “poor whites” but as someone that is simultaneously white and non-white. Because of such ambiguity, they have served to maintain race and class relations.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ文学 人種 階級 白人性

1. 研究開始当初の背景

「白人」という概念が合衆国において担ってきた特権的地位を批判的に検討する作業は、これまで白人性研究の名の下、社会学、人類学、法学といった分野を背景に持つ研究者たちによって学際的に行われてきた。しかしながら、貧乏白人そのものに特化した研究はこれまでのところ、極めて少ない。確かに東・南ヨーロッパからの移民の白人性に関する研究には、マシュー・フライ・ジェイコブソンによる *Whiteness of a Different Color* (1998) などがあり、白人の労働者たちが移民や黒人に対するレイシズムの分析についてはデイヴィッド・ローディガーの古典『アメリカにおける白人意識の構築』(1991) があるが、これらの研究では、白人性は、特権的地位を保証するもののみとして捉えられがちであり、特権を享受するとともに侮蔑の対象である貧乏白人の両義性はあまり問題とされなかった。こうした中、近年、社会学者マット・レイは、*Not Quite White* (2006) で、貧乏白人が「クズ白人」として、合衆国の歴史において他者として遍在してきたことを論じ、差別の主体でもあり対象でもある貧乏白人の二面性を明らかにしようと試みた。こうしたレイの実証的な作業やデジタルアーカイブの発達によって、貧乏白人の文化的表象を多角的に検証することが可能になってきた。こうした研究動向から、貧乏白人の文化的表象及び、彼らが加害者でもあり被害者でもある社会的不平等の複雑な構造を批判的に検討し、アメリカ社会が貧困と人種間の断絶と暴力を生む構造を問い直す必要があると考え、本研究の実施を思い立った。

2. 研究の目的

本研究は、貧乏白人 (poor white) という、18 世紀から現在まで合衆国に存在する社会階級の文化的表象の歴史の変遷をたどった。その際、主に次の三点を目的とした。

(1) 合衆国において貧乏であること、白人であることの意味がどのように変化してきたのかを整理する。

(2) 貧乏白人を人種的・階級的他者とする社会的差異・不平等の構造を明らかにする。

(3) 文学における貧乏白人の表象やその他の文化表象を通して諸作家をはじめとする文化表象に携わった人々が白人性の特権化と貧富の格差に根ざした社会的不平等をどのように捉えてきたか、またはそれらに対してどのように批判してきたかを分析する。

3. 研究の方法

本研究は、主に次の三つの活動を通して実施された。

a. 資料収集：貧乏白人に関する一次、二次資料を組織的に調査・収集、分類・整理する。

b. 理論的整理：白人性、人種関係、移民、

労働史、優生学に関する研究書を検討し、「人種」、「貧困」、「不平等」という概念を軸に貧乏白人の文化的表象を体系的に捉えるための理論的な基盤を整理する。

c. 新たな研究基盤の提起：研究会によって定期的に意見交換を行い、a, b の成果を検討することで、文学テキストにおける作家の社会的不平等に対する批判を明らかにする。

これらの活動を以下の方法論的観点から実践した。

(1) 歴史的アプローチ

20 世紀において貧乏白人は、例えば優生学的言説において、遺伝的に劣った社会不適合者として捉えられるという具合に、社会問題として顕在化ようになる。それに対し、19 世紀の半ばにおいては、貧乏白人は、奴隷制問題の背後に隠れるようにして前景化されることはなかった。このギャップは、いかにして生じたのかという問いに答えるため、本研究は、貧乏白人の歴史の変遷に着目した。

(2) 非文学的言説と文学テキストの分析

本研究は、文学作品のみならず、文学以外の文献を横断的に扱った。というのも、貧乏白人が特定の時代にどのように捉えられていたかを探るためには、当時の社会的・文化的言説を分析の対象とする必要があるためである。したがって、本研究では、奴隷制擁護論を展開する南部白人エリートによる書物・雑誌論文、優生学者による学術論文・報告書、人種関係を規定する法令・判決、貧乏白人を他者として表象する映画、大衆文学作品といった、従来の文学研究では注目が集まることは少なかった非文学的言説をも視野に収めた。と同時に文学テキストを通して、貧乏白人の文化的表象が体现する社会的不平等を批判的に検討した。

(3) アイデンティティ研究を超えるアプローチ

近年、文学研究では「人種・階級・ジェンダー」の標語のもと、文学作品にあらわれる社会的少数者の表象が盛んに論じられてきたが、その多くは、マイノリティの主体形成に焦点を当ててきた。本研究は、「白人性」や「貧困」が貧乏白人の主体形成にどのように関わってきたのか、また貧乏白人の存在がその他の主体（黒人、労働者、農園主等）のアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしてきたのかを明らかにするだけではなく、そのような主体形成の背後にある「白人性」というイデオロギーや「貧困」という現実がいかに社会的に構築され、補強されるにいたったかを分析することを目指した。

4. 研究成果

(1) 白人性の歴史化作業に対する貢献

これまでの白人性研究では、例えば、藤川隆男編『白人とは何か』(2005) がそうである

ように、白人に、希少で優秀な存在であると同時に普遍的な多数派であるという相反するイメージが付与されることで、白人性が屹立してきたと論じられてきた。本研究はこのような論点に加え、文学・非文学テキストにおける貧乏白人表象において「平等」や「暴力」「衛生概念」「血統」「移動性」等の歴史的要素が作用することに注目することで、優秀ではなく普遍的な多数派でもない貧乏白人表象を浮かび上げさせ、合衆国の貧乏白人表象の重層性を明らかにすることができた。例えば、19世紀末のチャールズ・W・チェスナットの小説では、上流階級の黒人が、教養や資産の点で自分たちよりはるかに劣る貧乏白人よりも、階層的に下に見られることよって生じる人種・階級間の緊張が描かれる。奴隷の解放によって、平等と正義が実現された後に、人種・階級間の緊張が増大し、貧乏白人の存在が前景化されるようになったと言えるだろう。このように様々な文学・文化的テキストにおける貧乏白人の表象を通して、貧乏白人の表象の歴史的変遷とは、「平等性」の意味が、人種関係の緊張、労働形態の変化、移民の増加、経済活動の多様化、衛生科学の発達、優生思想の出現等によって、挑戦されてきた過程であることが確認されたのが大きな成果であった。

(2) 各自の研究成果

研究代表者権田建二は、19世紀から20世紀にかけての人種関係を中心に、20世紀前半の優生学に頂点を迎える白人優越主義思想の源泉を調査し、黒人と白人の法的な分類が曖昧であり、これまで一般的にもまた人種関係の研究において思われていたよりも、白人と黒人は整然と切り離せないことを突き止めた。研究分担者生駒久美は、19世紀末の人種関係とマーク・トウェインのチャールズ・W・チェスナットら同時代のアメリカ文学に関する資料を調査し、トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』における貧乏白人の子供である主人公ハックがアイルランド系移民の子である可能性について考察した。研究分担者堀智弘は、南北戦争以前の奴隷制関連のテキストに表象された貧乏白人と黒人奴隷の関係に注目し、アイルランド移民が両者の間を媒介する存在であること、そして黒人が非白人として排除される契機を、アイルランド人が白人と見なされる歴史的過程にあることを確認した。研究分担者杉本裕代は20世紀半ばから現代にいたる南部貧乏白人の文学的・文化的表象の研究を20世紀半ばに活躍したフラナリー・オコナーの作品を通して行った。貧乏白人がオコナーの作品では、都市をさまよう反知性主義的な白人男性として描かれていることを確認し、オコナーの作品が冷戦期のリベラルのナラティブとの関係を明らかにした。研究協力者は、それぞれ文学的テキストに描かれている貧乏白人を通して、作家の階級意識ないしは社会的

格差に対する批判を明らかにした。研究協力者の渡邊真由美は、シャーウッド・アンダーソンの小説『プア・ホワイト』を通して20世紀初頭の貧乏白人の文化的表象について考察し、研究協力者の吉田要は、19世紀中葉の詩人エミリー・ディッキンソンの詩や日記といった文献に表れる貧乏白人及び階級の表象を分析し、研究協力者の花田愛は、20世紀初頭のジャック・ロンドンのエッセイやジョン・ドスパソスの小説における移動労働者ホーボーの表象について論じた。研究協力者の村山淳彦には、セオドア・ドライサーを中心に世紀転換期から1930年代にかけてのアメリカ左翼文学及び、アメリカ社会における貧困層の文学的表象を長年研究してきた立場から、研究代表者、分担者、協力者の各自の研究に対する的確な批判及び助言を与え、本研究での議論の方向性を定めることに貢献した。

以上の成果は、査読を経て学会誌等に発表されたものもあり、一定の評価を得ている。しかし、まだ公表されていないものも多くあり、研究期間は過ぎたが、これから各自で議論を整理し、公表する予定である。

(3) 今後の白人性研究の展望

本研究では、合衆国の貧乏白人の重層性を明らかにし、白人性研究を押し広げることを試みたわけだが、重層性が明らかになるということは同時にその本研究が当初想定していた範囲を超えるものであることが明らかになったという意味でもあり、今後の課題も多く浮き彫りになった。2016年にナンシー・アイゼンバーグによる *White Trash: The 400-Year Untold History of Class in America* という合衆国における貧乏白人の400年の歴史を通史的に扱った研究書が刊行された。本研究の成果及び、この研究によって、貧乏白人の歴史は、本研究が対象とした時間的範囲を大きく超えるものであることが明らかになった。貧乏白人の表象を歴史的にたどるためには、合衆国建国より遙か先、植民地時代のイギリスまでも視野に収めなければならないことを痛感させられた。また、2016年に、J. D. ヴァンスの『ヒルビリー・エレジー—アメリカの繁栄から取り残された白人たち』という自身が下層階級出身であった白人による回想録が刊行され、日米で話題になり、貧乏白人に対する関心が高まっていることが確認された。本研究では現代の貧乏白人の表象について十分に検討することができなかった。以上のような最近の貧乏白人に関する関心やその研究及び、そして本研究の成果を踏まえると、合衆国社会を理解する鍵として貧乏白人の重要性は今後ますます高まっていくと考えられる。と同時に、貧乏白人が合衆国の歴史においてどのような役割を果たしたのかを知るために、その文化的表象に注目する必要性も高まるだろう。今後の研究を通じて、貧乏白人研究の発展にさらなる貢

献をすることを本研究に参加した研究者各自の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

1 堀智弘、アメリカの奴隷の「栄えある復活」—一回心物語の書き換えとしての『フレデリック・ダグラスの生涯の物語』、黒人研究、査読有、86 巻、2017、12-24

2 生駒久美、ロクサーナの逸脱—『阿呆たれウィルソン』における感傷小説とスレイブ・ナラティブの間、マーク・トウェイン研究—批評と研究、16 巻、2017、36-45

3 堀智弘、アメリカの奴隷も崇高を唱う—フレデリック・ダグラスにおけるロマンティシズムの美学と自由の倫理、人文社会論叢人文科学篇、35 巻、2016、21-35

4 生駒久美、娘における父の不在—『心は孤独な狩人』におけるジェンダー・セクシュアリティと階級の交差点、大東文化大学 英文学論叢、47 巻、2016、11-26

5 生駒久美、"Adam's Invisible Hands: (Dis)equilibriums of Power in *The Golden Bowl*"、*Metropolitan: A Journal of Criticism*、査読有、57 巻、2015、95-110

6 権田建二、憲法の開放・奴隷の解放—フレデリック・ダグラスの合衆国憲法、アメリカ研究、査読有、49 巻、2015、177-195

[学会発表](計 5 件)

1 生駒久美、Was Huck White?: The Racial Boundaries and the Question of Class in *Adventures of Huckleberry Finn*、The Clemens Conference、2015 年 7 月 25 日、アメリカ合衆国ミズーリ州ハンニバル

2 堀智弘、南北戦争以前の奴隷物語の発展について—*Narrative of the Life of Frederick Douglass* (1845 年) を中心に、日本英文学会東北支部大会、2015 年 11 月 7 日、宮城学院女子大学(宮城県仙台市)

3 生駒久美、ロクサーナの逸脱—『阿呆たれウィルソン』における感傷小説とスレイブ・ナラティブの間、日本マーク・トウェイン協会、2016 年 11 月 5 日、立教大学(東京都豊島区)

4 堀智弘、Providence から Probability へ—Frederick Douglass の奴隷物語 (1845、1855) を中心に、日本アメリカ文学会東北支部、2017 年 3 月 4 日、東北大学(宮城県仙台

市)

5 生駒久美、白と黒—*Adventures of Huckleberry Finn* における人種・階級の境界線、日本アメリカ文学会東京支部、2014 年 5 月 17 日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

[図書](計 2 件)

1 権田建二 他、彩流社、アメリカン・レイバー、2017、未定

2 生駒久美 他、北樹出版、文学理論をひらく、2014、39-64、87-108

6. 研究組織

(1)研究代表者

権田 建二 (GONDA, Kenji)
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号: 00407602

(2)研究分担者

生駒 久美 (IKOMA, Kumi)
大東文化大学・文学部・講師
研究者番号: 00715063

堀 智弘 (HORI, Tomohiro)
弘前大学・人文学部・准教授
研究者番号: 10634719

杉本 裕代 (SUGIMOTO, Hiroyo)
東京都市大学・共通教育部・講師
研究者番号: 20581797
(平成 27 年 7 月 15 日削除)

(4)研究協力者

村山 淳彦 (MURAYAMA, Kiyohiko)
花田 愛 (HANADA, Ai)
吉田 要 (YOSHIDA, Kaname)
渡邊 真由美 (WATANABE, Mayumi)